

南半球便り（その 48）：安全保障協力の深化

12 月 9 日

早くも師走です。キャンベラ着任後、ほぼ一年になりました。それにつけても印象的なのは、最近の日豪間で掘り下げた安保論議が行われ、協力が深まっていることです。

1. 台湾

6月のことでした。日豪間では既に9回にわたって、いわゆる「2 プラス 2」の会合（両国の外相・防衛相が出席）が行われてきていますが、会談後の共同文書で初めて台湾問題への言及がなされました。

「我々は、台湾海峡の平和と安定の重要性を強調するとともに、兩岸問題の平和的解決を促す。」



第9回日豪「2 プラス 2」（出典：防衛省）

2. 東シナ海・南シナ海

豪州の安全保障政策を観察してきた識者の間では、従来、南シナ海と東シナ海に対するアプローチには違いがあると夙に指摘されてきたところです。

すなわち、地理的に豪州により近い南シナ海においては、関係国による海洋権益を巡る係争の激化、中国による急速な軍事化が国際社会の懸念の的となってきました。そのため、豪州政府としても積極的に発言するのみならず、日米との共同巡航・訓練など、航行の自由、上空飛行の自由をはじめとする「法の支配」の維持のため、大きな役割を果たしてきました。

他方、東シナ海では、現状変更の試みが同様になされてきたにもかかわらず、地理的に遠いことも手伝って、南シナ海ほどの関心や関与はうかがえませんでした。

南シナ海では、長らく豪州の対外政策の行動原理となってきた「見捨てられる恐れ」

(fear of abandonment) が作用してきたのに対し、東シナ海では「巻き込まれる恐れ」(fear of entanglement)が作用してきたと指摘される所以です。

ところが、尖閣諸島周辺、さらには台湾海峡を巡る安全保障環境が年々深刻化するにつれ、豪州としてもより強い関心を表明し、関与を深めることになっているのです。

3. 尖閣諸島への言及

加えて、今般ナショナル・プレス・クラブで行われたダットン国防大臣のスピーチでは、「台湾がとられれば、次はきっと尖閣である (If Taiwan is taken, surely the Senkakus are next.)」との発言がなされました。豪州の国防大臣による、ここまで踏み込んだ発言は初めてであり、歴史的な意義があるとして大きく注目を集めています。日本の報道機関こそ、注目してしかるべきでしょう。

尖閣諸島について言えば、国際法を学んだ者であれば誰しも、

(1) 日本が自国領土に明示的に編入した 1895 年から長らく異議は提起されなかったにもかかわらず、周辺海域海底での石油・ガス資源の可能性が取り沙汰され始めた 1971 年になって、初めて中国が異議を提起したこと、

(2) 第二次大戦後、米軍が尖閣諸島の久場島、大正島で射爆訓練を行った際ですら、中国から抗議さえ行われなかったこと、

の二点をもってして、「日本の領土であることは歴然」と受け止めるところです。

その上で、地域の安保環境を踏まえて尖閣諸島の戦略的重要性を喝破したところに、ダットン大臣の慧眼があります。地図を見れば一目瞭然ですが、中国大陆から東シナ海を渡り、沖縄本島・宮古島間を通して西太平洋に進出するという最短ルート of のすぐ脇に尖閣が存在します。その戦略的重要性は、日米のみならず豪州の洞察力ある識者に共有されているのです。



出典：国土地理院ウェブサイト「地理院地図（電子国土 Web）」を加工して掲載

4. 海・陸・空からサイバー・宇宙空間へ

日豪が共に取り組む戦略空間は、南シナ海・東シナ海のような海洋、「サザン・ジャカルー」で共に汗を流す陸上、「武士道・ガーディアン」で共に飛び回る空だけに限りません。サイバー空間、宇宙空間も協力の舞台なのです。

そこで、先週、招待を受けた宇宙シンポジウムにおいて私は講演をし、日豪間の宇宙協力の重要性を訴えました。【スピーチの[要旨](#)、[原稿](#)はこちらをご覧ください】



南半球宇宙シンポジウムでのスピーチ

5. 豪国防軍幹部との意見交換

また、日豪の国防関係者同士では日頃より密接な協力が行われており、つい先日にはバークランド陸軍本部長が訪日しました。

そうした中、先週にはキャンベル国防軍司令官をはじめとする三軍の大幹部を公邸に招き、突っ込んだ意見交換を行いました。北東アジア情勢、東南アジア情勢をはじめとして、インド太平洋の平和と安定を維持する観点から、語るべき話題は尽きませんでした。



キャンベル豪国防軍司令官と公邸にて

6. 未来志向の協力へ

第二次大戦中のニューギニアのココダでの日本軍との激戦は、豪州の軍人の中で語りつがれている話です。キャンベラの戦争記念館に行けば、特別な展示セクションが設けられ、激戦の様子が再現されている程です。

同時に、その近くには、第一次大戦中に帝国海軍の巡洋戦艦「伊吹」が中東、欧州方面に赴く ANZAC（オーストラリア・ニュージーランド連合軍の略称）の護送任務をインド洋で行った様子が展示されています。

まさに長い目で見れば、第二次大戦という不幸な時期はありましたが、その前の第一次大戦、そして 1945 年以降の戦後を通じて同じ側に立って協力を重ねてきた歴史が両国の間にはあるのです。このような歴史を通じて捧げられてきた両国関係者の犠牲と献身という基盤があってこそ、今日の相互信頼関係があります。

インド太平洋の安全保障環境が年々厳しくなるにつれ、「今そこにある危機」に対して日豪が共同で対処する必要性が強く痛感されています。両国間の安全保障協力が益々重要になっているのです。

山上信吾